

## 255. 信楽の注連縄文茶碗

### 1. はじめに

近世の注連縄文茶碗の研究は、まだ日が浅い。その存在が研究会で取上げられたのは、1994年12月17、18両日大阪でおこなわれた関西近世考古学研究会第6回大会において、徳島大学埋蔵文化財調査室の北條ゆう子氏が「徳島城武家屋敷の調査」という題の研究発表をし、合せて徳島城下出土の特異な陶器茶碗のことも報告した。この茶碗は、関西、九州、江戸の近世遺跡でもまったく見たことのない不思議なもので、徳島城下を中心に徳島県では出土するが、同じ四国の香川や高知では出土せず、北條氏も当日は、この茶碗は地元産であろうという見解を述べていた。これこそ今回事例報告する注連縄文茶碗なのである。

1996年になり、徳島と関西の研究者がこの茶碗について勉強会をしようという気運が高まり3月16日は徳島県埋蔵文化財センター、翌17日には徳島大学埋蔵文化財調査室に場所を移し、「徳島出土京焼系陶器勉強会」を開催した。16日は徳島県教育委員会、17日は徳島大学の調査担当者により徳島城下町の発掘調査概要が報告され、城下町出土の注連縄文茶碗を実見した。その折、徳島の研究者から著者に対して同碗が信楽窯から出土していないか、との質問を受けたが、同碗の素地と18世紀の信楽碗の素地は雰囲気が違う（同碗の方がやわらかく焼き上っている）ので同碗は信楽産ではないだろう。しかし、後にこの見解は誤りであることが分った。

その後、北條氏は江戸時代の文献資料にみられる「大福茶碗」の中に同碗が含まれることを推定し、また平野敏三氏の著作の中に「大服茶碗」という名称で徳島出土と同じタイプの注連縄文茶碗が信楽産として紹介されていることを確認し、1997年2月17日・18日には信楽において現地調査を行ったところ、徳島出土の注連縄文茶碗の中で19世紀代に増加する鉄絵タイプ（褐色の顔料で釉下に絵を描く碗）のものを4碗、窯表採資料の中から見つけ出し、2碗を実測された。

以上の成果については、1997年3月23日に徳島県立博物館で開催された考古学調査報告会において報告が

おこなわれた。これにより、徳島から出土する注連縄文茶碗のうち鉄絵タイプのは信楽産であることが、徳島県内の研究者に知られることとなった。

著者も北條氏に報告会の資料をいただいたこともあり、地元の利を生かし、信楽で独自の調査をおこなったところ、注連縄文を鉄絵で描くグイ飲を見つけた。また北條氏が確認をしながら、時間不足のため実測できなかった資料についても所蔵者の御好意により実測、発表の許可を得たため、北條氏が報告した資料と合せて今回報告したい。

なお、報告する5点のうち碗4点は、いずれも鉄絵タイプのもので、5番グイ飲も注連縄文の構成は碗と共通するものがある。

### 2. 資料の観察

図-1の1は、滋賀県立信楽窯業試験場蔵の資料で信楽の窯跡の表採品ということであるが、出土窯跡は不明である。全体の1/4程度遺存しているが、底部は欠損している。注連縄文は、中央の裏白（シグ）と両側のワラだけを描く。素地は淡灰色で固く、緻密で内外面に貫入がある。北條氏が実測している考古学調査報告会の資料にも掲載されている。

2は、個人蔵のもので、全体の1/5程度遺存している。文様構成は1とほぼ同じで、高台ぎわまで施釉される。素地は灰色で固く、内外面に貫入がある。所蔵者によると漆原（信楽町黄瀬）の窯跡で拾ったとのことである。漆原には江戸後期の窯跡が4基あるが、その中のどの窯跡で採集したかは不明である。

3も個人蔵で2と所蔵者が同じである。内側に別の茶碗を重ねて焼成されたようで、2碗が容着している。この内側の碗は、口縁部が逆台形を呈するいわゆる「小杉碗」である。2と3は似た形態をしている。高台ぎわまで施釉される。裏白の横の二重丸は注連縄の端の部分を示している体部に付着している破片は、同一碗の口縁の欠損部で、注連縄文の続きが描かれている。胎土は緻密であるが、焼上りはすこしやわらかい2と同様、所蔵者が漆原の窯跡で拾ったとのことであるが、やはり窯跡の特定はできない。

4は、2・3と持ち主は違うが個人蔵のもので、北條氏が実測し、報告会の資料に掲載されている。全体に丸く、高台ぎわまで施釉される、右側のワラの横に

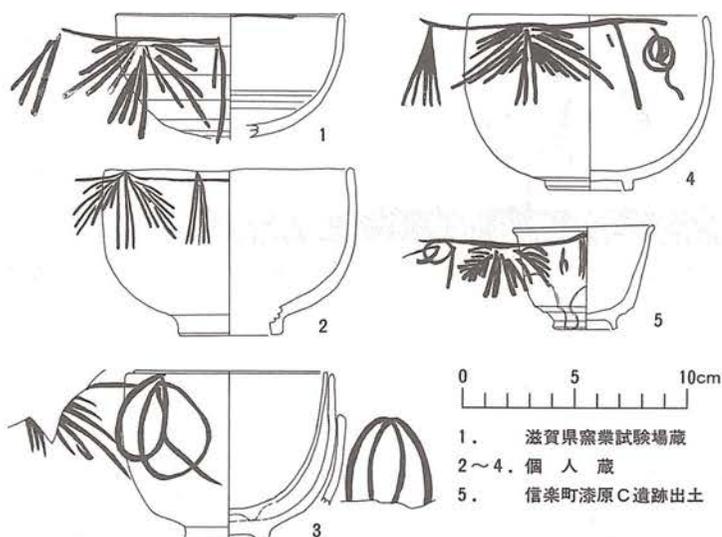


図1 信楽出土の注連縄文茶碗

描かれる二重丸は注連縄の端の部分を示している。釉は白濁している。

5は、注連縄文を描くグイ飲である。このグイ飲は完形品で注連縄文も全部残っている。中央に裏白、右にユズリ葉（下端が2つに分れた葉）とワラ、左にワラと注連縄の端の部分を示される。この絵を正面とすると反対側の外面にも同じ絵がある。釉は、内面には全部かかるが、外面は、ヒシヤクで粗くかけられたように流れており、部分的に露胎となっている場所もある。釉はやや濁って淡青灰色である。素地はうすい黄朱色で、高台・高台ぎわのケズリはシャープである。

5は、平成2年度に発掘調査された漆原C遺跡から出土したものである。漆原C遺跡は、江戸時代末から明治初めに稼働した全長約8m、幅2.3m、7～8室の登り窯で、神仏具、燈明皿、燈明台、香炉、水滴、小鳥の水入れ、グイ飲みなど小物が焼成された。近隣の五人山という土取場から発掘した良質の陶土でつくられていることから、胎土は精良で色も白く、磁器と見まがうほどのものもある。

5は窯跡に隣接する物原から出土している。同形のグイ飲で鉄絵で立鶴を描くものは、多く出土しているが、注連縄文を書くものは一例のみである。

この遺跡からは、明治二年の紀年を刻んだ窯道具が出土しており、また、同遺跡で焼成されたと思われる製品が江戸遺跡の明治時代初め頃の遺構から出土しており、操業年代を知る手がかりとなっている。

### 3. まとめにかえて

徳島出土の注連縄文茶碗についてのくわしい分析については、調査報告会の資料に述べられているので、概要を記しておきたい。

注連縄文茶碗は徳島固有の茶碗であり、県下で150個体の出土がある。＊最近の調査例では、最も古い1段階（18世紀前半頃）のものは、江戸・小倉などで出土している。

同碗には、絵付の種類により色絵タイプ・鉄絵十色絵タイプ・鉄絵+染付タイプ・鉄絵タイプの4種類がありそれぞれ、(18世紀前半～19世紀)・(19世紀)・(18世紀後半～19世紀初め)・(19世紀)に編年される。

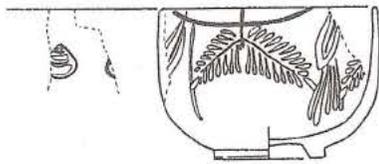
また、18世紀前半から19世紀までひきつづき製産される色絵タイプの注連縄文も1段階（18世紀前半頃）から5段階（19世紀）まで、時代が下るにつれて文様が退化する方向で変化する。

18世紀の前半の段階では江戸や小倉で出土するのに18世紀後半になると徳島固有の出土品になることについては、徳島には藩士が正月に登城すると藩主から茶を振舞われ、その茶碗を下賜する習慣があることが原因で(文献の初出は宝暦7年-1757年)同碗に色絵や鉄絵など彩色の方法が違うものがあることは、下賜される藩士の家格の違いによるものではないか、また大福茶の習慣のある農村から同碗の出土がみられないことは、同碗の使用が武士のみに認められていたことをうかがわせる。注連縄文茶碗の研究は、近世陶磁器の生産と流通を考えていく上で大きな研究成果であるとされている。

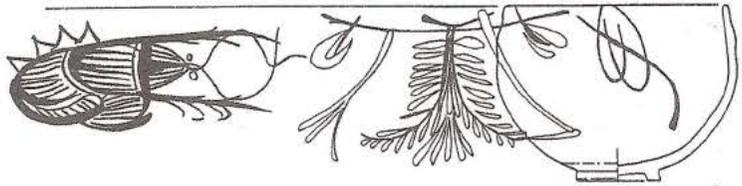
製産地(信楽)から見ると19世紀の段階で特定の消費地向けの商品の生産が行われていたことが確認された。18世紀前半の段階では全国で出土する陶器の一つとして京焼の注連縄文茶碗があったが、それに続く色絵タイプ等は生産窯がまだはっきりと確認されていない。信楽の製品としては、正月にちなんだモチーフとして若松碗(小杉碗)があるがこれも何らかの行事に使われたものか?等の今後、著者の取りくんでゆくべき課題を提示して筆を置きたい。(稲垣 正宏)

### 注

- ① 平野 敏三『日本の焼物』淡交社 1986  
大福茶は各地に見られる正月行事で正月の朝井戸から汲んだ水で湯を沸かし家族一同で茶を飲む習俗。煎茶の場合と抹茶の場合がある。そのときつかわれる茶碗が大福茶碗
- ② 北條ゆう子『阿波の注連縄文茶碗』(考古学調査報告会資料) 徳島県立博物館 1997年3月23日
- ③ 鈴木 良章『信楽町漆原C遺跡発掘調査の紹介』関西近世考古学研究II 1992 関西近世考古学研究会



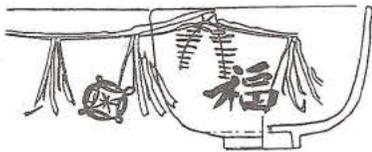
1 (色絵・18世紀後半)



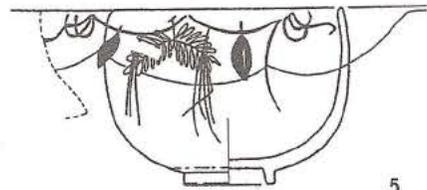
2  
(色絵・19世紀)



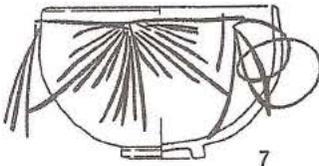
3 (鉄絵+色絵・19世紀)



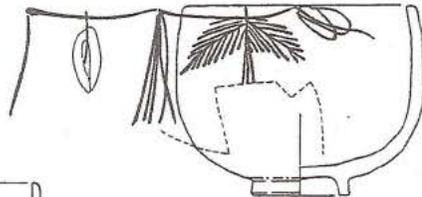
4  
(鉄絵+色絵・19世紀)



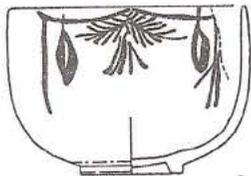
5  
(鉄絵+染付・18世紀後半)



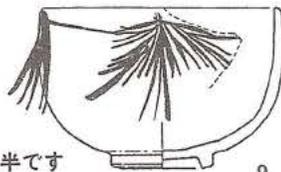
7



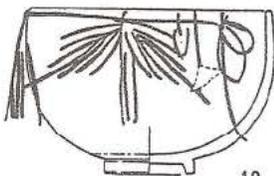
6  
(鉄絵+染付・19世紀)



8  
この鉄絵のタイプは18世紀後半です

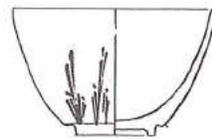


9



10

7~10  
(鉄絵・19世紀)



11  
参考・徳島出土の若松碗



図2 徳島出土の注連縄文茶碗

## 256. 弘化5年8月の藤岡和泉

—東浅井郡湖北町上山田所在

和泉神社所蔵資料補遺 1—

琵琶湖北東部の小谷城下にある和泉神社は戦国大名浅井氏以来、北近江で活躍した多くの武将の信仰を得てきたことで知られるが、長浜曳山祭の曳山製作者・藤岡和泉家とのかかわりからも、また著名である。藤岡家は少なくとも1680年代（延宝年間）には活躍の知られる初代甚兵衛光守にはじまり、代々にわたり長浜北伊部町（現在の長浜市元浜町）に住して、大工を営み、藤岡和泉を名乗っている。その関係する作品は湖北地域を中心に、北は福井県から南は京都府にまで及び、繊細な細部意匠や彫物に力点をおいた小型の建造物や造作物を得意としていたことが知られている。わけても和泉壇とよばれるその仏壇は浜壇（長浜仏壇）の祖型として湖北地域ではあまりにも著名で、長浜曳山祭の曳山はそうした独特の作風をもつ藤岡和泉家のすぐれた技術が、もっとも凝縮したかたちで展開したものと評価されている。

藤岡和泉の名乗りは、彫物などの優れた建築装飾技術を誇った藤岡家が、中世以来、その先進地であった和泉国の受領名を名乗ったものであり、和泉神社と直接的な関係を有すわけではない。しかしながら2代長好が、当時広く信仰を得ていた和泉神社本殿を宝永4年（1707）に建造したことから、大工としての名声が急速に高まり、その受領名がひろく認知されるようになった可能性が高い。

そしてその結果、次のような伝説が生まれている。藤岡和泉の名乗りは和泉神社の本殿があまりにもすばらしい出来だったので、和泉の名乗りを得た。

藤岡和泉家は4代利盈が天明5年以降、事故等により

実質的に大工を引退せざるを得ない状況におかれ、文政4年（1821年）には継子のないまま没している。その間、曳山の建造は、すでに分家していた初代の弟・重兵衛重光の子孫がつぎつぎと手掛けている。しかし5代安舒、6代安道、7代安則が和泉を名乗った資料が知られていなかったため、大工としての藤岡家は重兵衛家が継ぐものの藤岡和泉は甚兵衛家の名乗りと考えられてきた。ところが近年、天保13年（1842）の西浅井町八田部の五社神社神輿棟札が発見され、晩年の安則が藤岡和泉を名乗っていることが判明した。重兵衛家は利盈が没した安則の晩年になってようやく藤岡和泉を名乗り得たと推測される。

弘化5年（1848）8月の和泉神社本殿の高欄・縁まわりの修理にかかる棟札は、そうした藤岡和泉家と和泉神社のかかわりを示す資料として、また7代安則が藤岡和泉を名乗る資料として重要と考えられるので、以下に詳しく報告したい。なおこの棟札はこれまでその存在は知られていたが、棟札そのものが報告されたわけではなく、またその年号を弘化2年とするなど誤って紹介されている。

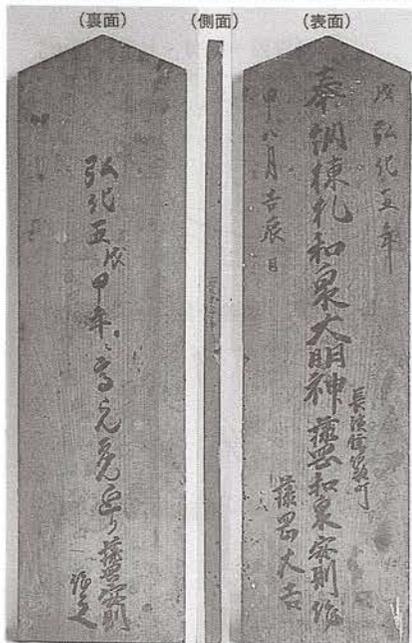
棟札は上側の頂部が山形を呈した短冊型のスギ板で、縦長は山形の頂部で52.4cm、裾部で49.3cm～49.5cm、横長は14.3cm～14.4cm、厚みは1.3cm～1.4cmを測る。表裏側端面のいずれも台匏により平滑に仕上げられ、側端縁には微細な面取りが認められる。上側の2箇所には釘穴が認められることから、棟札として実際に打ち付けられていたことがわかる。

表裏両面の墨書は同筆であり、表面にはその上側の中央に「奉納棟札和泉大明神」、その右側に「戊 弘化五年」、左側に「甲 八月吉辰日」、また中央の下側には「長濱住伊部町／大工藤岡和泉安則作／藤岡大吉」と記す。裏面はその中央に「弘化五戊甲年ニ高らんゑん廻り藤岡安則／作之」と記す。なお表面からみて左側の側面には「百九十三年目」と記される。

この墨書にみえる藤岡大吉は藤岡家の一族と見られ、先述の五社神社神輿棟札にも安則とともに見える。また側面の墨書については、特に「年」をみれば明らかのように、表裏面の墨書が横位に「一」状の線を引くとき、中央付近の上側が「へ」状にふくらむ癖がある。それに対し側面のそれはむしろそれとは逆に中央付近の下側がふくらんでいる。したがってこの側面の墨書は表裏両面のそれとは異筆で、後世に書き加えられたものと判断される。しかしその意味では不明である。

【参考文献】北村圭弘「近江大工・藤岡和泉の名乗りについて」（『研究紀要』第5号／滋賀県安土城郭調査研究所／1997）

（北村 圭弘）



弘化5年の和泉神社本殿の高欄・縁まわり修理の棟札